

## 再読・倉橋惣三

## 倉橋惣三の「子どもの生活」理解を探る

— 保育から小学校教育へ 「談話」と「国語科」との連続性 —

児玉衣子

## はじめに

筆者はこれまで倉橋惣三の保育論ばかりを読んできました。最近ようやくそれ以外の論にも目を通し始め、彼が学校教育に対してずいぶん積極的に、また、かなりの量の発言をしていたことを知りました。それらの幾つかを読んで強く感じたのは、倉橋は学校教育についても「子どもの生活」になるように一貫して論じている、ということでした。

多くは大正半ばから昭和初めにかけての論ですから、現在とは教育を取り巻く状況も教育自体もずいぶん異なっていたでしょう。しかしそれでも大正自由主義教育と呼ばれて、わが国の戦後教育が発達できたのはこの時代を経ていたからだと今日評価されるほど、教育の創意工夫が活発に行われた時代でもあります。その一環にある彼の論を、ここでは「国語科」を取り上げ、保育との連続性における今日的意義を探りたいと思います。

## 1 「国語科」に関する発言から

倉橋惣三は「国語科」に関して、一九二五（大正十四）年十月、雑誌『教育論叢』に「読本以外の国語教育―国語科の実際方面―」と題して今日なお興味深い論を展開しています。その内容を略述しますと、国語科の主機能は読解と発表にある。まず、読解については、①受動的に与えられた字句の読解から、②自ら進んで読む意志的読解までの進展が求められる。そのためには、③読本（教科書）だけでは不足で、読書教育すなわち図書への親しみ、図書の選択、正しい読書方法が国語科においてなされることが必要である。米国シカゴ大学附属校で見た図書館の積極的活用とそこにかがわれる教師の準備と工夫は、自分にとっても学びが大きかった。

次に、発表については、①作文尊重はしばしばいわれるが、②言語発表が重視されていない。学芸会等の特別な場合の言語発表だけではなく平常の教室における、文字をたどらずに考えを整理、伝達、感情の表出を練習させる言語発表の教育も国語科の一職能でなくてはならない。③言語発表のもう一つの主要な手段は印刷である。活字印刷という発表形式とその工夫研究も国語科の最も現代的な一活動だろう。これについても米国で見た子どもたちの生き生きとした活動が印象に残っている。

以上のような倉橋の論からうかがわれるのは、国語科は国語の読解だけではなく、「聞く」「話す」「読む」「書く」という言葉の四種類の基本的機能を全般的に獲得させる科目であるべきだという、彼の強い問題意識です。

## 2 保育項目「談話」についての発言から

幼児期の子どもの言葉に関する倉橋の意見は、『倉橋惣三「保育法」講義録』（フレーベル館 一九九〇年）の中の保育項目「談話」に詳述されています。ここで倉橋は、言葉の四種の基本機能のうち、幼児期に成長し、また育てる主な力は「聞く」「話す」の二つであるとします。そして、話す力は自分の話すことをよく聞き取ってもらうことができると育つので、保育者の大事な役割は子どもの話をよく聞き取ることだとしています。

具体的活動の配慮では、自由遊びは子どもと1対1の関係が最も生じやすいので子ども一人ひとりに気を配ることが最も求められること、また絵本の読み聞かせのような一斉活動も、一見子どもは拘束されているようだが実は子どもは絵本と共に活発に動いてイメージをつくること、日常生活の何気ないひとコマを題材にする日常話も大切なこと、そして、何よりも子どもは話の内容以上に「先生と私（たち）が一緒に楽しんでる」それ自体の味わいを楽しんでいること等々、倉橋の「談話」論は子ども心の動きと保育者の配慮について細やかに語られます。それらを通して私たちは、「聞く」「話す」という二つの力の育ちは、心を動かし体を動かす原動力になって気持ちの自由感を得ることへと根本的につながり、成長の原動力になっていることに気付かされていくのです。

## 3 倉橋惣三の願った言語能力

倉橋惣三が当時の「国語科」に対して抱いた不足感は、1で挙げた論の題目に「読本以

外の」と彼が断っているように、国語科というと一般的に教材には教科書、内容には教科書の内容の読解しかイメージされないところにありました。教員はたいいてい国文科出身、さらに日本の長年の伝統であった寺子屋教育は漢文の「童子教」「実語教」等の口伝えの斉唱と手習い（習字）が「読み」「書き」でしたから、国語科になっても教科書中心、「読み」「書き」重視というあり方は日本の伝統的な体質だったのではないかと思われます。

それに対して倉橋は、言葉に対する彼自身の際立つて豊かな感性を土台に、子ども自身の生活から生じ経験へと突っていく学習の生活を大事にし、そのような子どもたちの学習を成立させる教授法を求め、学校においてもその意味での「子どもたちの生活」が成立することを求めます。その基礎には、人間としての尊厳性を最も直接的に表現し守るのが言葉の役割だという西欧近代教育の巨大な思想系譜が感じられます。その思想的影響の下にいるからこそ倉橋もまた、幼児期には言葉の機能のうち、「聞く」「話す」という力の育つ保育のあり方を重視し、小学校期になると「聞く」「話す」「読む」「書く」という機能が万遍なく十分に育てられることを求めていると考えられるのです。

なぜなら、右掲の国語論だけを見ると倉橋はただの米国新教育運動の追従者に見えますが、しかし、晩年の自伝『子供讃歌』によって彼が生涯ペスタロッチに心酔し続け、子どもたちの友フレibelを敬愛したことを知ると、倉橋は新教育運動だからその思想と実践に追随したというよりも、むしろ米国新教育運動にペスタロッチやフレibelの抱いた理想の一つの具現を認めたが故に米国の成果を積極的に紹介していると感じられるのです。

ペスタロッチが近代学校教育を創造した土台には、彼の生涯を貫いた「貧しい人々が自分

の言葉で自分の意思を伝えることができる」、すなわち教育を通して人間の尊厳性を守り、実現するという悲願がありました。言葉の教育はまさにその基礎作業でした。また、ペスタロッチの影響を受けたフレーベルは、人が生まれた時からその本質を損なわれずに成長できるために乳幼児期の教育を創り出して西欧近代教育の悲願を完成しました。フレーベルは一八四〇年六月に世界最初の幼稚園を創設しましたが、その開園式をグーテンベルグ印刷技術発明四百年をも含む四重の祝いを兼ねて挙行し、グーテンベルグの印刷技術発明の意義を、人類のために精神の光と生命を広く伝える松明をともした、と称えています。そして今日、印刷・コピー技術を駆使する喜びと責任は、さらに増大しています。

ここまで述べてきて今現在の私たちとして気付くことは、「聞く」「話す」「読む」「書く」という言語の基本的機能でさえ、機能である以上は何のためにそれを成長させるのか、という目的によりその効果の内容をも変えるという事実です。倉橋の提起した問題点は、日本の子どもの言語能力の成長の意義を、いつ、どこにおいても通用する人間としての成長においていたからこそ捉えられた問題点でした。その際、彼の論は、大きな目的を指す営みであつても子どもの安心と意欲を損なわずに涵養する日常のさりげない「子どもの生活」として、常に具体的配慮に満ちて語られます。短い国語論においても、保育から教育へ一貫する倉橋の息の長い教育の心構えの揺るぎのなさ、そこから生じる具体的配慮の幅広さ等を改めて感じさせられます。

(龍谷大学短期大学部)